

狂言の語と狂言風流

享保保教本の〈松・竹〉

田口和夫

野村万蔵家の若い役者が日吉神社の奉納で狂言の語りである〈松の語〉と〈竹の語〉を語ることにあり、その内容について問いわせてきた。和泉流の語についてはかねて万蔵師と検討していたところだが、このような典型的祝言語まで、検討の手がのびないままだった。この機会に、狂言の語と狂言風流との関係について考えておきたい。なお、狂言風流については天野文雄氏「翁猿楽研究」（和泉書院、平7）・岩崎雅彦氏「江戸初期の狂言風流」（『能研究と評論』15、昭62・5）によってその成立・固定期の様相は相当に解明されてきている。ここでは天理図書館善本叢書『鷺流狂言伝書』通称享保保教本の記述によって、その後の狂言風流の特色について考えることになる。

とある。鷺伝右衛門家初代の伝右衛門了意は保教の実父だが、了意の段階ではまとまった狂言台本は執筆されてはいなかったと私は考えている。残されていたのはこのような断片だけだったのではなからうか。保教は「作り懸け」と言っているが、その実はあら筋的な台本が残っていたのであり、保教時代の完備した台本様式から見ればそれはメモ的な「作り懸け」とも見えたのである。〈竹〉だけでなく〈布袋〉も同様だったとすると、その蓋然性は高い筈である。その証拠に保教が完成したこれらの風流は、それ程複雑なものではないのである。

さて、〈竹の風流〉は千歳の風流である。初日の式で千歳が謡う「鶴ハ千歳フル君ハ如何」という言葉の「君ハ竹」の縁に引かれて、竹の精が登場し〈竹の語〉をする。そこへ赫夜姫が出現し、不死の薬の威徳を語って相舞となり、富士山へ帰る、という内容である。この竹の精が語る語に注して「此語ハ竹之語ト昔ヨリ在之、座敷語也」とする事に注意した

い。風流の主要な構成要素である語が本来は独立して演じられる語、それも小規模な場にふさわしい座敷語であった、ということとは、一般化して考えられることだからである。

保教本の風流の語には独立語とする時の注が付いている。まず「夫竹ハ内清外直ナル物ナレバ」という語り始めには、「竹トイツハ共語出ス、但座敷語ニスル時ナリ口伝」という。風流ではこの一文の後、「サレバ万ノ歌ノ一節モ竹ノ節ヨリ事起、如何ナル祝ノ座敷ヘモ」となる所、「座敷ニテハ万ノ歌ノヨリモ語」とする。「それ竹といっぱ」から直接にここに続くのである。そして「語斗ノ時ハ事起松竹梅ト并ラレト云」と注する。「松竹梅・」を補入するのである。最後に「ナンボウ目出タキ物ニテ候ハヌカ」に「語斗ノ時ハ目出度物語ニテ候ト留ル」とする。大正十四年野村萬斎著『狂言正本別巻』に収められる〈竹の語〉は最後の留めを別にして他の部分は注記通りの表現である。萬斎に至る経緯についてはまだ明らかにしていないが、その伝承が享保以前に遡り得る本文であることは確かである。留めの「物語にて候」という表現は、以前万蔵師と狂言語について整理した時に、独立の語としては、この方が落ちつくことを確認して〈朝比奈〉の語などをそのように扱ったことがある。

同じく保教本に風流へ子日がある。

そこでは松の精が登場して語るのだが、「語ハ松脂ノ狂言ノ内ニ書タル故不記、松脂ノ末ニ松ノ語色々アル内子日ノ松ノ文句アル此風流ノ語ナリ」と注する。へ松脂は同書にあり、その末の三四六頁に「風流ノ語也」と注して「丁固ノ松ノ語」が見える。三四七頁には「京流丁固ノ語」として「松脂ニ用ル時ハ此語也」と注する語がある。両者を較べると、いずれも有名な中国の「呉の丁固が松を夢見て公の位に登る」という故事を踏まえているが、共通して母が夢を見ることになつている。問題は前者「風流ノ語」とされる方に「子日ノ松」の言葉が含まれず、京流の語とする方に「子ノ日ノ松ヲフクムト見テ胎内ニヤトリ」という言葉があることである。前引の注記では「色々アル」と言いながら二種しかないのだが、これをどう解したらよいか。三四六頁の「風流ノ語也」はここで引用している他の注と異なり、保教自身による後記である。これを勘案すれば、保教が初め風流を記録した時は京流と同じ「子の日の松」を含む語をその語として意識していた。後に「松脂」を記録する段階になつて、それが京流の語であつて驚流のものではない事が気になり、よりすっきりした形の丁固の松の語を創作し、これを風流に用いることにした、という事情だつたと

推測される。ここでは狂言へ松脂に用いられる語と風流の語とが共通なのである。天理本狂言六義を見ると「松脂」の「抜書」に、保教が「京流」というこの語がほとんど同文で載せられて、「京流」とする情報は確かなのだが、これを含む狂言へ松脂」と風流へ子の日」はどちらが先行するのであらうか。狂言は、大勢が「松拍子」という訳で「松やに」を離している、そこへ松脂の精が登場するという筋立てになつてゐる。これは福神狂言で神の来臨を待つ手法と類似ではあるが、より風流の演出と同類なのである。

『天理本狂言六義』の頭注で永井猛氏が指摘されるように『名語記』に説かれる中世の松拍子は「仙人ノ装束ヲマナビテ、小松ヲ手ニサ、ゲテ推参」する芸態を持っていた。風流に登場する松の精も松を頭に戴いた仙人の姿である。天野文雄氏は前掲書で中世民間に行われた松拍子の囃物を狂言役者が模したことが一つの基盤となつて「よせふりう」が形成され、狂言風流に発展したことを説かれているが、それはこのような出物の性格の類似から見ても首肯される。へ松脂」も筋立てのみから言えば風流と同類であり、「松拍子」そのものを取り上げている点から言えば、より中世民間の松拍子に近いとも見られるであらう。ただし、だからと言って狂言へ松脂」がただちに風流に先行するとは

言えない。狂言の「松脂の精」は演技として粘りながら歩行するのだが、これはへおがの松」などの風流に登場する松の精のモドキの形と考えられるからである。松の精の存在を前提として始めて松脂の精が登場する必然性があるのである。問題とした前後関係は「子の日」が前と言えれば簡単だが、その風流の成立かいつかは確かめられず、不明とするしかないであらう。ただし、松脂の精の語が松脂を語らず松を語っていること、虎明本へ松脂」には語がないことを勘案すれば、狂言へ松脂」には本来は語がなく、この語は独立した狂言語であつたものを、天理本は狂言に取り込んで演じ、風流へ子の日」も同様に取り込んだと考えられる。

こう考えると、風流の出物が登場してすぐに自らの由来を語るといふ型が確立しているところで、古くから存在していた祝言語が利用されたということが推測されることになる。岩崎氏は間狂言から風流への創作過程を想定されたが、それとともに独立の狂言語から風流へという創作過程をも想定できるのである。保教本には「七福神」風流から狂言へ福相撲」を作つたといふ記事もあり、「狂言ナレ共何モ真ニスル狂言ニハ風流ノ伝有之」とも言っている。狂言風流と脇狂言との間は案外に近かつたようだが、これは別に考えたい。

(文教大学教授)